

集

俳句フォーラム

2022年10月 第85号



円の会

春の闇

大山夏子

枝垂梅影もしだるる音もなく
再びの声聞かせてよ春の闇
諸葛菜崖の一隅染めて咲く
常盤木落葉朝夕の袋詰め
手づくりの新茶の香り友の声

憶測

若泉真樹

冠木門閉ざしひっそり花の雲
悔いいくつ墓前に置けり白牡丹
山映す沼の静寂川蜻蛉
憶測で物言勿れ柿の花
緑さす樹々の言葉の奥の院

花吹雪

石川東児

初花や函嶺未だ醒めやらず
春の雪青春諸もろ遠ざかる
花吹雪分かれて筏そして塵
ひと棹の滯曳く小舟初夏の湖
大瑠璃の美声近づけば鳴き止む

片栗の花

仁上博恵

春曙半僧坊の深い息
辛夷大輪山野にひそとして気品
片栗の花の輝く山毛櫸林
酒一合そして穴子の櫃まぶし
初夏をホップステップスニーカー

きらり

瀬戸美文

握り飯青春の日も辛夷咲く
退院の朝八重桜咲き揃う
心配事消えて目覚めし朝寝かな
皐月ばれ朝富士きらり茹で卵
らつきよう漬ける見ている母の笑み嬉し

遠桜

日置瀨魚

遠桜出会いも別れも懐かしき
スタートはものの勢い四月尽
たんぽぽの群生それが今日の幸
蘊蓄の何だかんだと梅雨催
余生大事緑濃くなる楠大樹



藤の会

雲の峰

江口 九星

親子のかたち 大山 夏子

陽炎を見下している孔子像
花散るや湯島天神門いくつ
薄暑かな親子のかたち垣間見る
転げ来し梅の実愛し連れ歩く
立石寺のみんな今も耳底に

白アスパラ 渡辺 節子

入学も走って迎えるランドセル
上雲雀まけじとはしゃぐ土手の児ら
烏らなく弘法大師の春の山
雲の峰に走る光や慎太郎
十葉や母が干したる軒の棚
故郷を恋う難民や明易し

行く春を見ずに屍となりし君
ラフマニノフ遠くに馳せる夏の宵
白百合の群れさえ眩し昼下がり
アントレは異国懐かし白アスパラ

茄子の花

中川のぼる

青き空に白をちりばむ梨の花
世の常の斜陽の影や暮るる春
春の夕後光満ちゆく寺の庭
夏の恋立場も捨てる覚悟かな
薄暗き無為のしじまに茄子の花

海ぶどう

伊藤 昌枝

海ぶどうはじけ口中春いつぱい
花筏音無川に紗織めく
雨つづく林檎の摘花里便り
宇宙船希望なるかや夏の星
花菖蒲名を競いあう雨上り

平和

吉宇田麻衣

平和希求荒廢の地に青葉を
夏の月回峰行の待つ先は
もうこれで終わりと願う夏の空
ようやっと一息つけと花水木
卒業や母校手伝う師の笑顔

一輪草

楠本 和弘

不条理のはびこる星や一輪草
春愁やイヌワシの眼に虚空みる
飯蛸と土佐酔自慢のいごっそう
青蛙の蹲踞取水ポンプ前
思ひきや芦野の里の岩燕

旅

渡部 恭子

瀬戸内に陽光満ちて山桜
花見鯛瀬戸の恵みをもろもろに
旅空へ背筋を伸ばし春シヨール
酸欠の左脳しがらみさくらんぼ
和太鼓の葵の連打夏来る

陽だまり

小澤えみ子

風生れてゆるる筑波嶺山桜
うたたねの猫豆の花陽だまりに
絹莢の色も摘みとり夕餉にす
さくらんぼ供う写真の微笑あり
注ぎ切る最後の一滴新茶かな

蟻の列

酒井たかお

フェイクてふ言葉賤しや桜散る
停戦も和平も遠し落椿
新玉葱白くて無垢なてる坊主
梅雨ふかし三日採らねば胡瓜巨大
軍拡はいつかきた道蟻の列

航空便

由良 則子

爆煙が阻む太陽閻の春
草叢にここよここよとチューリップ
大銀杏青葉が空を独り占め
落し文前略もなく早々も
ほうたるの航空便で我が家に來

移ろい

高畑 太朗

安達太良はいま残雪ぞ友の墓
さざなみに光が躍る田植え明け
角打ちにぶらり立ち寄る月見草
親燕のフェイント多し巢に戻る
残りいる実を狙い撃ち雹の降る

九重句会

ラジオ体操
細井 寿子

巢組みする鳥ハンガー雀り取る
一椀の粥にほっこり花冷えて
薬や生きる力の均等に
不揃いなラジオ体操風光る
青胡桃放課後クラブさんざめく

五月空
伊藤美沙江

象潟
若泉 真樹
春愁の思考混乱してアナログ
蜘蛛の子を捕らえて放つ朝の庭
亡き人と象潟に在り風薫る
白南風の羽衣を着て松林
門の前で鎮座す蟾蜍

沈丁の香コスモマスクを物とせず
花を摘む兎等走り出す初蝶へ
露をむく亡母のまるき手を想う
点滴棒連れて見上げる五月空
マスク外し頬張る風はラムネ味

若葉風

鈴木 公子

雪柳風とらえれば微かでも
「歩こう会」駅に集合若葉風
亀泳ぐ右に左に花筏
春行かず昇降機は点検中
変声期混じるコーラス花は葉に

無念無想

日置 游魚

少し酔いピントの甘い花ばかり
窓からの定点観測花三分
目借時無念無想を試みる
縦皺消えた山法師咲きだした
大方は疵もて生きる五月闇

春の闇

大山 夏子

墓地覆うさくらの中で何探す
再びの声聞かせてよ春の闇
花の寺友逝きし穴胸奥に
亡き人の家にも届け若葉風
蔦若葉面影風となりむなし